

第41回大会 2008.8.6~8.7

会場；国立オリンピック記念青少年総合センター

8月6日（水曜日）

【開会式】（9時50分～10時00分）研究会会長挨拶、大会オリエンテーション

【10:00～11:40】

A-1「聴覚障害児の評価と指導」

東京学芸大学 濱田 豊彦

聴覚障害の一番の特徴は、目に見えないということです。その困難に敏感であることが聴覚障害児の指導では求められます。この講義の中では、オーディオグラムの見方などの基礎知識に加え、聴覚障害児がどのようなことで本当に困るのか、悩んでいるのかに気づくことのできる目を養いたいと思います。また、発達障害のある聴覚障害児についてもその対応等に触れる予定です。

B-1「吃音児の指導の実際」

金沢大学 小林 宏明

吃音がある子どもは、うまく話せないという言語症状面の問題に加えて、発話やコミュニケーションに対する不安や自己肯定感の低下等の心理的問題や周囲の人の不理解やからかい等の社会的問題等を抱えています。本講座では、これらの問題の概略や特徴について説明すると共に、これらを踏まえた指導・支援の方法について具体的な事例を取り上げながら会場の皆さんと考えていきたいと思っています。

C-1「子どもを見る目・育てる心」

東京学芸大学名誉教授 谷 俊治

言語障害児を前にして、先ず必要なことは子どもの問題を発見し理解することです。そのためには、診断という作業的、思考的プロセスのなかで、子どもの問題を見立てていかなければなりません。診断によって子どものことばの問題の素因、維持因、促進因などを探り出し、どのような考え方や方法で指導をすすめていったらよいかについて、事例をもとにして解説します。

【12:50～14:30】

A-2「吃音の基礎知識と新たな視点」

東京学芸大学 伊藤 友彦

吃音症状をもつ子どもたちが豊かな学校生活をおくるためには、教師、保護者をはじめ、周囲の人々が吃音について正しい知識をもっていることが必要です。この講義では、吃音の基礎知識と最新の知見を紹介し、さらに、従来の研究成果をふまえた言語臨床のありかたについて述べます。

B-2「言語発達遅滞の指導の実際」

東京学芸大学 大伴 潔

本講座では、「語彙を育てる」「文を構成する」「文章で表現する（談話）」「効果的に伝える」といった各言語領域の発達過程を概観しながら、適切な指導目標の立案と、興味を持たせる課題を通じた指導について考えていきます。言語検査の例として「LCSケール」を取り上げ目標設定のあり方を考えるとともに、言語発達支援の効果的なアプローチについて検討します。

C-2「事例検討の意義と進め方」

目白大学 羽田 紘一

言語障害児の教育的診断・指導を効果的に行うには、子ども理解や指導過程を検証しながら進める必要があります。“事例検討”は、その検証方法の一つとして有効であるといわれています。なぜ有効なのか、どのような方法があるのか、教育におけるPDCA〔計画（plan）、実行（do）、評価（check）、改善（act）〕サイクルとの関連などを、参加者の体験も踏まえて考えていきます。

【14:50～16:30】

A-3「言語発達遅滞の評価と指導」

東京学芸大学 藤野 博

言語発達遅滞には、知的障害や自閉症スペクトラムを背景とする場合や、音声言語のみに顕著な問題を示す特異的言語発達障害（SLI）などいくつかのタイプがあります。本講義では「聞く・話す」ことに困難を抱えるタイプのLDの基本障害として近年注目されている特異的言語発達障害と、自閉症スペクトラムにおける会話やコミュニケーションの問題に焦点を当て、評価と指導のポイントを概説します。

B-3「聴覚障害児の指導の実際」

千葉県立千葉聾学校 田原 佳子

聴覚障害児を担当したら、どのような指導・支援を行えばよいでしょうか。ある事例を取り上げ、共に考えながら、直接的指導・支援及び間接的指導・支援を探ります。日記指導等による言語力を育てる学習、自由会話によるコミュニケーション能力を育成する学習、「きこえにくさ」について話し合い、自ら通常の学級、学年に発信する難聴理解授業を通じた自己肯定感を高めていく支援等を紹介します。

C-3 「発達性dyslexia(発達性読み書き障害)の評価と支援」 筑波大学 宇野 彰
全般的知能には問題が認められないのにひらがなが覚えにくい。練習しているようだが漢字が覚えられない。テストではできているのに、二ヶ月前に覚えたはずの漢字が思い出せない。小学高学年になっても、ひらがなやカタカナで誤る。特に、小さい「つ」の誤りが目立つ。知能が正常な場合、発達性dyslexiaである可能性があります。評価法を中心に支援の方法についてもお話します。

8月7日(木曜日)

【9:10~10:50】

A-4 「構音障害児の評価と指導」 上智大学 平井 沢子
構音障害をもつ子どもの評価と指導についてお話します。お子さんに多い誤り音や誤り方を中心に、具体的な構音訓練の進め方についてお話したいと思います。訓練で悩むことの多いポイントにふれながら進めたいと思っています。またご参加くださる先生方から、ご担当のお子さんについてのご相談があれば、時間をとりたいと考えています。もしもご相談したい事例があれば、当日ご相談ください。

B-4 「側音化構音・口蓋化構音の指導Ⅰ～歪み音の理解と聞き取り」 昭和大学歯学部口腔リハビリテーション科 山下 夕香里
側音化構音や口蓋化構音の子どもの評価法についてお話ししたいと思います。これらの音は歪み音なので慣れていないと聞き取りが難しく、現場で悩まれる先生方が多いのが現状です。いろいろな子どもの側音化構音や口蓋化構音をVTRにて紹介しながら聞き取りのポイントや、舌や下顎の動きの観察法などこれらの構音障害の判定法について紹介します。

C-4 「検査法の活用について」 國學院大学幼児教育専門学校 石川 清明
コミュニケーションに障がいのある子どもの教育的診断や指導を進める際には、種々の「検査」が用いられています。教育サイドで広く使用されている標準検査を取り上げ、検査の進め方や実施上の留意点、得られた検査結果からどのような情報を引き出し、どう解釈することができるか、検査結果を日々の指導にどのように応用できるかなど「検査法の活用」について事例を紹介しながら理解を深めます。

【11:05~12:45】

A-5 「発達障害児の個別指導計画」 東京学芸大学 橋本 創一
発達障害児の教育支援と個別指導計画について概説します。気づき→スクリーニング→アセスメント指導の実践サイクルによる①支援計画の実際と作成ポイント、②支援計画つくりのためのアセスメント法の色々(知能検査、学力チェック、行動診断、コミュニケーション行動評価、学級風土調査など)、③支援計画を活かした指導法の色々(状況認知と談話の指導、SST、学習支援など)を紹介します。

B-5 「側音化構音・口蓋化構音の指導Ⅱ～舌のトレーニング法の紹介」 昭和大学歯学部口腔リハビリテーション科 山下 夕香里
側音化構音や口蓋化構音のお子さんの舌は、発音時に奥がもりあがったり、細長く緊張したりします。そのため舌を平らにすること、舌の筋力やコントロールを高める指導が重要です。お口の体操の指導をさらに進めた舌のトレーニング法についてお話したいと思います。実際に体験していただきたいので、鏡、舌圧子、ストロー、ペンライトなどをご用意ください。

C-5 「障害幼児の指導について」 國學院大学幼児教育専門学校 野本 茂夫
障害幼児の支援には、幼児の生活や遊びを通して、よりよい発達を促す幼児期にふさわしい支援の在り方を具体的に考えます。その中で、幼児教育の基本を踏まえながら、幼児の生活や遊びを通じた支援の重要性を事例を基に明らかにします。障害のある幼児も自らの中に育ちつつある力を生かす支援が根本です。障害幼児の指導にあっても子どもの育つうれしさを大切にしたい支援を考えたいと思います。

記念講演 【13:55~15:55】

講師 古荘 純一(青山学院大学)

演題 「気になる子どもの理解・支援のために」

大人は、子どもの行動面や学習の問題は気づきやすいのですが抑うつや不安などの内面的な問題は気づきにくいと言えます。不登校・いじめ・自殺行動・非行などの臨床教育学的諸問題も、内面的な問題と深く関連しています。両者を結びつけるコンセプトは自尊感情と考えています。今回は、私たちの調査を含めて、内面的な問題にどのように気づき支援につなげていくかをお話ししたいと思います。

講師略歴

84年、昭和大学医学部、88年同大学医学部大学院卒業。90年医学博士取得。97年昭和大学医学部小児科講師を経て、2002年より現職。小児科医、小児精神神経科医、小児神経科医として、発達障害、トラウマケア、虐待、抑うつ、てんかん、少年犯罪などの臨床と研究を続けている。

現在は大学生のみならず、教職・保育職など子どもに関わる職種の人に、子どもの精神面の問題について広く講演、啓発活動を行っている。(イーウーマンHP、紹介プロフィールより)